

総合教育セミナー だより

第74号

平成15年10月24日

☆教育相談セミナー「現代子ども論」
☆ちょっと工夫をしてみませんか？
☆スポット

☆新「京都みらいネット」のサービス紹介
☆お知らせ

紙上教育相談
セミナー I

現代子ども論 —ハリーと千尋をもとに—

京都大学大学院 教授 山中康裕先生

6月に開催した府民開放講座「教育相談セミナー I」には、精神科医、臨床心理士として著名な山中康裕先生を講師にお迎えしました。前思春期の少年少女を主人公とした映画「ハリー Potter」と「千と千尋の神隠し」をモチーフに、山中先生から現代の子どもの心の深層についてお話いただきました。天候の悪い中、300名を超える参加者があり、子どもの心への関心の高さがうかがえました。講演の概略と質問回答の抄録を紹介します。

10歳の女の子、11歳の男の子

「10歳の女の子、11歳の男の子、この年頃にどのような世界とのコミュニケーションがあり、どんなことが起こり、何がそこで問題となるのか。」この20年間ずっと考えてきました。

このように考えているところに「千と千尋の神隠し」というすごい映画と「ハリー Potter」シリーズが出てきたのです。

千尋の「勘」

小学5年生10歳の春。気の進まぬ引っ越しの途中にあったトンネル。それをくぐれば、そこは異界。その異なった世界に入ったことを認識していないお父さんとお母さん。異界でモノを食べたらその世界のしきたりに従わねばならないし、もう二度とこちらへ戻れない。親はそのことに気付かないのです。10歳の千尋は向こうの世界の見通しがつくわけではないのですが、何か感じるものがある。 「ちょっと変。食べちゃダメ。」と言うのですけれど、その前に両親は食べて、豚になってしまったんですね。

生き生きしはじめる目

引っ越しに向かう車の中では、ふてくされていた千尋。半開きの目は無気力そのもの。まさに今の現代っ子らしいところ。そのトロンとした目が、変わります。

湯屋で初めて任された仕事。オクサレ様と呼ばれたヘドロまみれになった神様を一所懸命に洗う千尋。オクサレ様がきれいになって、川の神様に戻った時に千尋の目はきらきら光るようになった。「自分にもできる」ことに気がついていい顔になっていったのでしょうか。

ハリーも11年間、階段下の小屋のような部屋でうつつと暮らしていたのが、「ホグワーツ魔法学校」に入學して無二の親友となるロンに出会えた。1年生ながらクィディッチというスポーツの重要なポジションに選ばれて、少しずつ男の子らしく成長していく。そこで生き生きとしてくるんですね。

これらの中で、示してくれているのは、「本来

の自分」というものを見つめることができた時には、現代でも生き生きと生きることができるのではないのでしょうか。

異星人のようにさえ見えると言われる子どもたちも、ふた皮、み皮もむいたら本体が出てくるのです。けれどそれを他人がむいちゃダメなんですよ。自分でむかなければ、自分で気が付いて、自分でそこを出て来なければダメなんです。

そこがカウンセリングと似ているところ。



人間への期待

生まれた時は白紙であるという発達論をとる人もいますが、私は人間は、実は最初のゼロの段階からすでに「ほとんど」を持っていると考えています。

心の問題としてお話をしていますが、女の子の10歳、男の子の11歳はすごい世界に到達する時です。そしてそのことは、ほとんど記憶の外、覚えていません。

ユングという心理学者の言葉を使えば、普遍的無意識の層で触れているからです。それは、個人的なパーソナルな無意識でなく、もっと深い層なのでせいぜい夢に出てくるぐらいです。そこで触れているので、皆さんがお忘れになっているのも無理のないことです。その最中にいても分からないのです。

自分の中にある悪とどう折り合いを付けるか

これも大事なことですが、悪は外に在るのではありません。私の中に在るのです。皆さんの心の中に在るのです。

その悪を認識して、その悪とどう折り合いを付けられるようになるかということ。また、その悪を、他人まで及ぼすことなく、どう遮断できるかということこそが人間として成長していく道ではないのでしょうか。